Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-08

『三国志演義』研究 : そのテキスト生成に関する考察

竹内, 真彦

(Degree)
博士（学術）
(Date of Degree)
2000-09-30
(Date of Publication)
2007-10-19
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
甲2303
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002303

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

【199】

氏　名・(本　籍)　竹内　真彦　(静岡県)

博士の専攻分野の名称　　博　士　(学　術)

学　位　記　番　号　　博い第３４１号

学位授与の　要　件　　学位規則第４条第１項該当

学位授与の　日　付　　平成１２年９月３０日

【学位論文題目】

『三国志演義』研究

－そのテキスト生成に関する考察－

審　査　委　員

主査　教授　釜谷　武志

教授　森　紀子　　助教授　福永　進

本研究は中国講史の代表と言うべき『三国志演義』（以下『演義』）について、そのテキストが如何に生成されてゆくかという観点から考察を行い、先行研究では餘り顧慮されなかった『演義』の特徴について明らかにすることを企図したものである。

第一部は、『演義』が伝説を如何に受容するかを論ずる。従来、『演義』は『三国志平話』（以下。『平話』）や『花関索伝』と比較して、史実に接近しているという側面ばかりが強調されてきた。全般的に捉えたとき、そのような見解は肯定せざるを得ない。しかし一方で、『演義』には、『平話』などよりも積極的に伝説を受容している面も確かに存在している。従来、この面が餘り問題とならなかったのは、『演義』の語り口が巧妙な所為であろう。『演義』は受容した伝説の荒唐無稽さを合理化し、あたかも史実であるかのように記す。換言すれば、『演義』では史実と伝説がほとんど不整合を起こすことなく並べられており、『演義』以外のテキストと比較することに因って、初めて伝説を伝説として認識し得るのである。

第一章では、呂布という人物に焦点を当て、『演義』での彼をめぐる伝説について検討した。史実において彼は二度までも主君を殺した不忠の臣である。『演義』は基本的にこのような史実を継承し、彼の不忠を厳しく指弾する。ただし、その一方で、呂布はまた勇武の人として描き出されもする。これは、『演義』以前のテキストが呂布の武勇に纏わる伝説を語っており、『演義』がそれを受容したからである。本章では呂布が持つ二つのアイテム、方天画戟と赤兔馬が呂布の伝説と密接に結びついていることを明らかにした。

方天画戟は早くとも宋以降に出現したものであり、三国時代の人物である呂布が手にしたはずがない。つまり、呂布が方天画戟を持つという構図は疑いなく伝説である。そして、同様に後世になって方天画戟を持たされた人物に薛仁貴がいる。そこで、呂布と薛仁貴が現れる史書以外のテキストを閲すると、呂布は李粛という人物と、薛仁貴は葛（蓋）蘇文という人物と対にされている例が多く見られる。李粛が薛仁貴と、葛蘇文が呂布と類似した容貌で語られていることから推して、呂布と薛仁貴という対を語るために李粛と葛蘇文は創出されたと考えられる。『演義』では、李粛と呂布を対と看做すことはできないが、史実に比して呂布と李粛の関係は密接になっており、薛仁貴と同じ方天画戟を持つことと併せて、先行する伝説を『演義』が受容していることを証明していよう。

さらに、この二者はともに李広という漢代の英雄を祖型としている。先行する英雄が後代の英雄の形象に影響を与えることは普遍的に見られるのであり、呂布と薛仁貴の対は二人が祖型とする人物が一致することから創造されたのであろう。

次に赤兔馬について論じた。『演義』で呂布以外に赤兔馬に乗る人物として関羽が挙げられる。呂布が赤兔馬に乗るのは史実であるが、史実の関羽と赤兔馬は無関係である。つまり、関羽と赤兔馬の関係は伝説なのだが、この伝説に関連して呂布と赤兔馬の関係にも変化が生じた。伝説において、呂布は赤兔馬を得るために主君を殺さねばならないのである。この変化は、呂布から関羽に赤兔馬を移行させるために必要な措置であったと考えられる。さらに関羽と赤兔馬という関係は、『演義』が最も積極的に語るのであり、『演義』が単純に史実に近づいただけのテキストではないことは明らかであろう。

第二章では、諸葛亮と司馬懿という対偶について論じた。「死せる諸葛、生ける仲達を走らす」という諺が象徴するように、この二人は屢々

好敵手同士として理解される。それは、諸葛亮が臨終まで固執した北伐において、司馬懿が最大の敵手として意識されるからである。しかし、史書を見ると、この二人は恒常的に直接戦っていたわけではなく、北伐終盤において初めて矛を交えるのである。

むしろ、諸葛亮と司馬懿という対偶は後世のテキスト、具体的には『平話』と『演義』が好んで語る処である。両者は諸葛亮と司馬懿が直接戦う回数を増補し、対偶を強調する。しかしその語り方は対照的であり、『平話』が史実を逸脱して奔放に語るのに対し、『演義』は史実に準拠しつつ巧緻にこの対偶を増幅する。『演義』テキストの特徴が如実に現れていると断じてよいであろう。

第二部は、『演義』が長篇として如何に堅牢に構成されているかという観点から論じた。餘り強調されないことだが、長篇であるということは『演義』の大きな特徴である。

第三章では『演義』の劉備について分析した。『演義』の劉備には数多くの「逃げる」挿話がある。これらの挿話は多く原型を史書に求め得るが、史書には見えない要素も多い。第一に指摘しうるのは劉備が皇族であるという点から考えて、これらが一種の貴種流離譚と捉えられることである。ただし、一般的な貴種流離譚に留まらず、『演義』は独自の要素を附加している。すなわち、劉備は逃げる先々で「劉」という同姓の人間に助けられるのである。その中の二人（劉表・劉璋）は史実でも劉備を助けるのであるが、他の四人（劉焉・劉恢・劉虞・劉安・劉辟）は実在しなかったり、実在しても劉備との関係は薄い人間ばかりである。そして、『演義』において彼らは劉備を助ける役割のみを負っているのであり、『演義』が劉備が「劉」をめぐるという構成を意図的にとっていることは明らかであろう。見方を変えれば、『演義』が長篇として緻密に構成されている証左とも言えよう。

第四章では曹操について論じた。一般的に、彼は『演義』において悪役となっていると認識されている。しかし、先行研究により、通行本が曹操の悪役としての面を強調していることは明らかとなっており、今一度再検討する余地があろう。

そこで、本章では従来用いられる事のなかった観点から曹操の形象について分析を試みた。すなわち、テキストにおける曹操の呼称に着目するのである。そして、『演義』における曹操の呼称を拾い出してみると、「曹公」「丞相」「魏王」といった尊称に属するものが多いことに気付く。無論、曹操の配下が発話（セリフ）で尊称を用いるのは当然なのだが、叙述（地の文）でも用いられていることは注目すべきであろう。

例示した三者の中、「曹公」は史書にも頻出するものであり、その影響が強いと見て間違いない。問題は残る二者である。

「丞相」は史書で曹操の代名詞として用いられることはなく、『平話』や雑劇などで多用されるものである。その「丞相」の呼称を『演義』が用いていることは、第一部で述べた如く、『演義』が史書だけではなく『平話』などの所謂「民間」系テキストの影響をも深く受けていることを証拠立てているであろう。

最後に残った「魏王」は『演義』独自のものであろう。『平話』などで用いられる例は極めて少なく、史書などでは「魏王操」の如く諱を続けるのが通例だからである。

それでは、『演義』が「魏王」という呼称を用いた結果、どのような現象が起こるのであろうか。目を転じて、劉備と孫権の呼称を見ると、彼らも「漢中王」「呉王」という王号を代名詞的に用いられていることが確認できる。ならば、呼称の面に関する限り、曹操・劉備・孫権の三

人、ひいては魏蜀呉の三国は対等であると言い得るのではないだろうか。

この事実を承認するならば、従来言われてきたような、『演義』は蜀漢を正統とするという歴史観を持つという認識に対して修正を施さなければならないであろう。

そこで、第五章では三国の統一を果たす司馬炎の形象について分析し、『演義』の歴史観に再検討を加えた。

司馬炎は諸葛亮後半生の敵手であった司馬懿の孫であり、その伯父と父は魏の権力を一手に握り皇帝の廃立すらも恣にした人物であった。すなわち、明確に悪役の系譜に連なる人物である。しかし、『演義』は司馬炎と彼の建てた晋王朝を肯定する言説を繰り返す。それは呼称の面でも顕著であり、魏蜀呉の皇帝に対してほとんど用いられることのなかった「帝」の呼称を司馬炎に許すのである。『演義』が司馬炎の晋を正統と看做すことは明白であろう。そして、「帝」と称されることのない三国の皇帝は全て正統ではない。

従来、『演義』は、南宋の『資治通鑑綱目』（以下、『綱目』）などを踏襲して蜀を正統とする歴史観を持つと信じられてきた。筆者も『演義』が蜀に対して同情的であることは認めるが、それと「正統と看做す」ことは必ずしも一致しないのではないか。例えば『綱目』は蜀漢の皇帝を「帝」と称し、蜀漢の年紀を用いる。対して『演義』は蜀漢の皇帝を「主」と呼び、年紀は不統一（場面によって異なる）なのである。

『演義』にあって、「帝」とは後漢と晋の皇帝のみを指す語であった。その間に横たわる三国時代には「帝」は存在しないというのが『演義』の歴史観であり、従来比定されてきた正閏論とは一線を画すものと見るべきであろう。三国時代とは混沌であり、『演義』は統一（後漢）から混沌（三国）へ、混沌から統一（晋）へというシンメトリーを描いてストーリーを完結させるのである。そして、このような巧緻な構成は、『演義』の長篇として堅牢さをも示しているであろう。

（一段　三二字×二五行［二〇〇字］で構成している。約四〇五〇字）

［課程博士用］

（別紙１）

論文審査の結果の要旨

氏　名	竹内　真彦
論文題目	『三国志演義』研究 ――そのテキスト生成に関する考察――

要　旨

本論文は、明代に成立する講史小説の代表作『三国志演義』を対象に、その生成過程に着目して、伝説をどのように受容しながら、ひとまとまりの長篇小説としての統一性を保とうとしているかを明らかにした意欲的な研究である。

従来の研究では、演義が正史である陳寿の『三国志』とどう違うのか、あるいは宋元の語り物の面影を伝える『三国志平話』を、史書によってどう修正して史実に近づけたか、という点に重きが置かれていた。これに対して本論文は登場人物の描かれ方に焦点をしぼって、人物の呼称などから物語の生成過程を探究する方法を採用し、語り物や演劇からどんな部分が小説にとりこまれていったかを研究しており、演義研究の新しい地平を切り開いたというに値する。全体は２部に分かれ、第１部では主に、演義が平話よりも史実に近づいている側面を認めながらも、逆に荒唐無稽な伝説をも取りこんでいることを実証し、第２部では史書に見えない挿話を積極的に組み入れて、全体として独自の歴史観に基づいて構成されていることを論ずる。

第１章では、史書において不忠の臣とされる呂布について、彼に付与される方天画戟と赤兎馬を手がかりにして、呂布の武勇の側面が新たに創出されていること、それが漢代の英雄李広を祖型とした伝承に基づくことを明らかにする。そして本来無関係であった関羽と赤兎馬を結びつけるために、呂布が主君を殺して赤兎馬を入手したという話を作るなど、演義がむしろ史実から遠ざかっている点を指摘する。

第２章は、諸葛亮と司馬懿とについて論じる。この組み合わせ自体は史書にあるものの、演義では両者の対戦回数を水増しして、対立をより強調していること、平話に比して演義では、多くの伏線を張るなど巧みな操作を経て、読者に抵抗を感じさせることなく史実らしく見せながら、両者の対立を増幅していると述べる。

第３章では、演義に劉備が逃走する挿話が数多くあることに着目する。原型を史書に求められない、創作された挿話が少なからずあり、劉備が皇族であること等から、これを一種の貴種流離譚ととらえる。さらに劉備が逃げる先々で「劉」姓の人間に助けられることから、劉備が漢王朝の血を引く「劉」氏を渡り歩く、という構図を創り出すための構想であるという。架空の登場人物である劉恢や劉安の名が、漢王朝を恢復し、安んずることを意味している点を指摘するなど、創見に富んでいる。

主査記載 氏名・印	釜谷　武志

第４章では、演義最大の敵役と目される曹操の呼称を分析する。その結果、曹公・丞相・魏王など尊称に属するものが多いことを発見し、曹操の配下の会話文のみならず、叙述（地の文）にも見られることを重視する。曹公は史書にも頻出するが、丞相は平話や雑劇に多用されていて、演義がこれらのテキストの影響を深く受けていることの証左であるとする。魏王については演義独自の呼称であって、劉備・孫権がそれぞれ漢中王・呉王という王号を用いられていることを併せ考え、魏蜀呉の三国が対等に置かれているという興味深い結論を導き出す。演義において劉備対曹操が、善対悪という従来言われていたような二元論になっているのではなく、文字通り三国鼎立の時代としてとらえられていたことが、ここに至って始めて示される。演義が蜀漢を正統とする歴史観を持つというこれまでの認識に、修正を迫るものである。

第５章では、三国の統一を果たす晋の司馬炎をとりあげ、演義の歴史観に再検討を加える。諸葛亮の敵方に属し、魏の実権を掌握した側の、悪役の系譜に連なるはずの司馬炎と、彼が建国した晋に対して、演義はきわめて肯定的であって、三国の皇帝にはほとんど用いなかった「帝」の呼称を、司馬炎に用いている事から、演義が晋を正統と見なしていると説く。従前、演義は南宋の『資治通鑑綱目』などを踏襲して、蜀を正統とする歴史観をもつとされてきた。しかし、『綱目』が蜀漢の皇帝を「帝」と称し、蜀漢の年号に基づいて記述されているのに対し、演義ではそれを単に「主」と呼び、年号は不統一であることを挙げて、晋を正統とみなすことの傍証とする。演義は三国という時代を中心にあつかって展開するものの、じつはその前後の後漢と晋だけを正統とみなしていたという、演義の歴史観の解明は、本論文をまってはじめてなされたのである。

このように従来の定説に訂正を迫る箇所が少なからずあり、至る所に創見が見られる点は、高く評価できる。反面、「史実」「伝説」などの用語の定義にあいまいな部分があること、明代の社会風俗との関連をあまり考慮に入れていないことなど、不十分な点もある。しかし、通説に対して果敢に挑戦し、新見解を随所に提示しつつ、説得力をもって論を進めていく本論文の研究成果は、これらの瑕瑾を補ってなお余りある。他の主要人物の呼称についての研究と併せ、今後の課題としてさらなる研究の深化を期待したい。

以上の結果に鑑み、本審査委員会は論文提出者竹内真彦が博士（学術）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。

審査委員

区　分	職　名	氏　　名
主　査	教授	釜谷　武志
副　査	教授	森　紀子
副　査	助教授	福長　進